



酷暑の夏に思うこと

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

▼搬送こそされませんでしたでしたが、私自身や家族も明らかに熱中症の症状に陥り、あわてて氷枕やエアコンに救われるという経験をしました。とにかくいろいろな意見に惑わされずに、部屋を涼しくして休むことを心がけるしかないかというのがとりあえずの結論です。

▼今年の夏は四万十市で41度を記録するなど、とにかく猛烈な暑さ続きでした。熱中症で搬送される方が後を絶たず、その半数以上が高齢者だそうです。齢を重ねると次第に暑さを感じなくなるからだというもつともらしい解説がありました。戦中戦後の貧しい時代を

超えてきた世代の方々、やはりエアコンをつけ続けることに心理的な抵抗が強いためではないでしょうか。

▼猛暑の背景に世界的規模の異常気象があることは疑いようがありません。北極の氷が解け始め、アメリカや中国を熱波が襲うといった情報が次々に出現している現実を見れば、地球温暖化の進行は、もはや否定しがたいといえるでしょう。

▼にもかかわらず、日本における地球環境問題への関心はかなりトーンダウンしているようです。かつて鳩山首相はCO₂を25%削減

すると世界を相手に大見得を切りましたが、当時の政府の試算では、その実現には原子力発電の比重増大が不可欠でした。後継の菅首相は東日本大震災を受けて脱原発を打ち出しましたが、CO₂削減をどうするかについては、明確な説明はありませんでした。

▼もともと25%削減についての国内合意はなかったと切り捨ててしまうのは簡単です。しかし、この問題について先進国日本の責任として、どういう方針を持って取り組むのかを、世界に説明する必要があります。原子力発電を廃止するならば、地球環境問題解決と両立する道筋を明らかにしなくてはなりません。火力発電の比重が増大し、化石燃料の輸入が急増している現実に眼をつぶり、「電力は足り

ている」と叫ぶ愚かな声ばかり通る現実には、夏の暑さ以上にうんざりします。

▼ところで、都市部の暑さについてはヒートアイランド化も大きな要因です。冷房の排熱や、舗装道路の蓄熱など、原因が明らかでも、取り除くことが困難な要素が都会には蔓延しています。しかし、効果のある緩和策もないわけではありません。都市の緑化と水辺の再生はその筆頭でしょう。屋上の緑化や道路の地中化のように投資が必要な対策だけではなく、街路樹の枝を切らずにもつと茂らせるだけで効果があるという提案を伊藤滋氏がしたことがあります。しかし、こんな簡単なことも、なかなか実現しません。樹木の伐採も立派な利権の一つだからなのでしょう。